わからなくても、想像してほしい『兄の名はジェシカ』　　2021年5月
眞鍋由比

2015年、一橋大の法科大学院生が同性愛者だと同級生に暴露されて転落死しました。同性愛などの性的指向（例えばゲイやレズビアン）や性自認（自分の性別をどう認識しているか、トランスジェンダー等）を本人の了解なく第三者に漏らす「アウティング」といいます。一橋大のある東京都国立市は2018年４月、アウティングを禁じる全国初の条例を施行しました。

「LGBT」という言葉を聞いたことはありますね。女性を好きになる女性はレズビアン（Lesbian）、男性を好きになる男性はゲイ（Gay）。男性も女性も恋愛対象になる人はバイセクシュアル（Bisexual）。生まれた時の性別と違う性別で生きようとするトランスジェンダー（Transgender）。それらの頭文字でLGBT。

トランスジェンダーの人は、自分の体の性別に違和感があります。体の性別に応じた男らしさ、女らしさを求められることが苦しく、服装や髪形、場合によっては名前も変えて、ようやく毎日を快適に過ごせるようになります。

同性を好きになる人は人口の３～５％ぐらい。クラスに一人。トランスジェンダーは300人に１人ぐらいと言われています。だからうちの学校にもいる可能性が高い。

これはお兄さんがトランスジェンダーの物語。映画『スタンド・バイ・ミー』のように何でもできる、弟思いの自慢の兄。お母さんは首相を目指すゴリゴリの大臣で、お父さんはその秘書。サムは難読症で、文字を読むのが難しく、クラスではいないもの扱いされている。誰よりも大好きな、輝く存在だった兄が、ある日、「ぼくはおまえの兄さんじゃない。ほんとうは姉さんなんだと思う」と家族の前で告白。平和な毎日が崩れていく。話を聞こうともせず「カウンセラー」に行かせる両親、学校ではクラスのみんなに馬鹿にされ、からかわれ、誰より人気者だったジェイソンはパーティにもよばれなくなる…。
そしてサムはジェイソンを深く傷つけることをして、ジェイソンは家を出てしまいます。

お兄さんはトランスジェンダー。体は男だけど心は女。でも好きになるのは女の子。すこしややこしい。志尊淳のドラマ「女子的生活」みたいな感じ。

ぼくはおまえの兄ちゃんじゃない。どちらかというと姉ちゃんだ。お前はいつまでも弟だけど。
治ってほしいというと「お前はこれが病気だと思うのか。病気にかかっているって」涙を流して傷つく兄。謝るタイミングを逃す僕。

あとがきでも書かれているように、作者のジョン・ボインはゲイであることを告白するのに苦労したとのこと。周囲の無理解についての描写がリアルです。

弟が字が読めなくて仲間はずれにされていることにたいしてジェイソンが

人間は、わからないものに対してそういう態度をとるもんだ

と言っています。周りに理解されず、からかわれ、馬鹿にされ、自殺に追いやられるほどの痛み…自分ではわからなくても、想像してみるようになりたいと思います。そういう意味で、この小説の結末は少し明るい。

同じ作者の『縞模様のパジャマの少年』は第二次世界大戦時、敵味方で仲良くなる少年たちの物語。驚嘆するエンディングでした。本もＤＶＤもありますのでよければぜひご覧下さい。

『兄の名は、ジェシカ』は2021年度全国青少年読書感想文コンクールの課題図書（高校）です。